

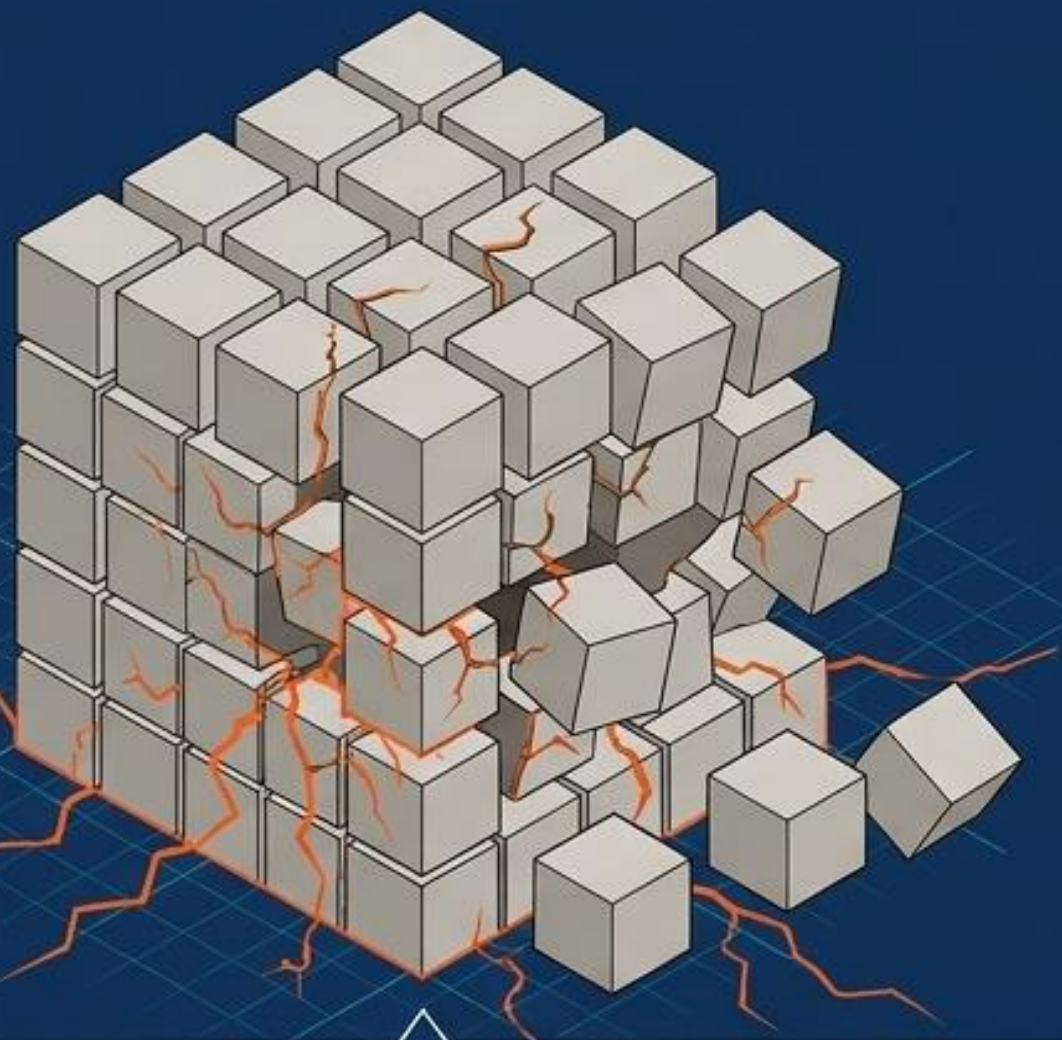


医学の設計図：生理学という名の「臨床推論OS」

膨大な医学知識を乗りこなし、かけがえのない医師になるための思考法

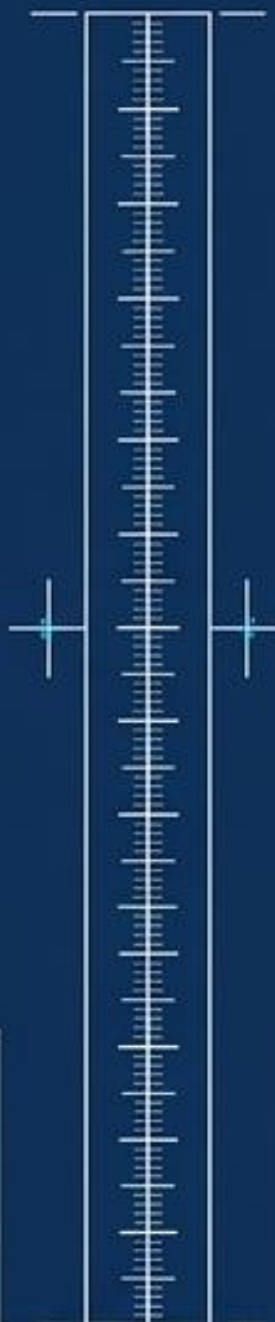
医学部基礎医学講座

膨大な医学知識を前に、我々はどう学ぶべきか？



「丸暗記中心の学習」

大学受験までの成功体験が引き起こす罠。医学知識は膨大であり、単純な暗記は覚えにくく、すぐに崩壊(忘却)してしまう。



「理論的理解に基づく学習」

記憶に残る学習システム。学習しやすく、忘れないためには「理論的に理解して覚える」ことが不可欠。

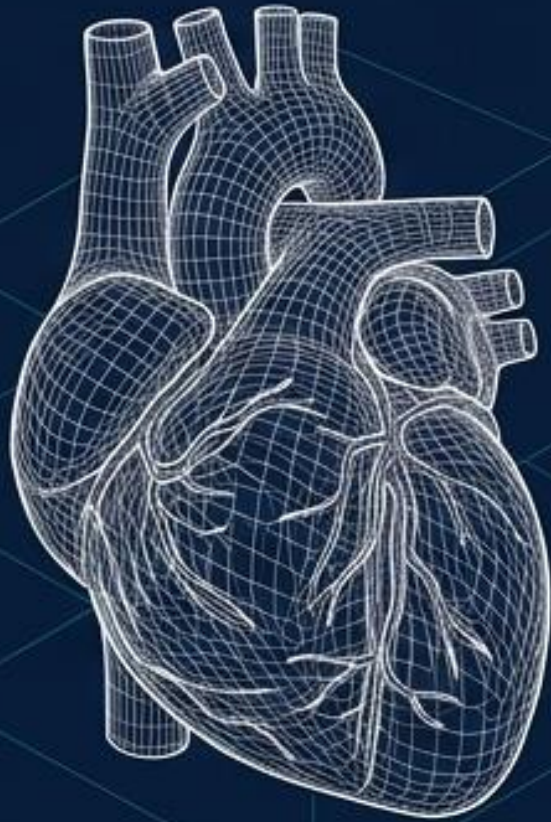
その鍵となるのが、医学のOSである「生理学」である。

学習アプローチの比較：なぜ丸暗記は臨床で通用しないのか

比較項目	丸暗記中心の学習 Rote	理論的理解に基づく学習 Logical
学習のメカニズム	単語や結果の「点」の記憶	理由とプロセスの「線と面」の構築
記憶の定着率	極めて低い（すぐに忘れる）	高い（関連付けにより引き出しやすい）
試験への有効性	通用しない（特に4学年のCBT・国試）	高い（未知の症例にも応用可能）
脳への負荷	知識量に比例して無限大に増大	原則を理解すれば負荷は劇的に低下

臨床医学を効果的に頭に入れるためのポイントは、
「理論的理解」と「印象づけ」の2点。

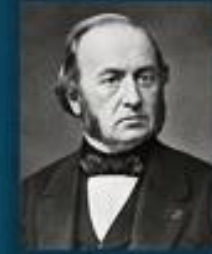
生理学とは何か：生命の「機能」を解き明かす学問



構造（ハードウェア）：解剖学・組織学・病理学



機能（ソフトウェア）：生理学



クロード・ベルナール
『実験医学序説』
（岩波文庫）より



「病的状態を理解するためには、正常な状態の知識が必要である。」

「科学的医学は生理学の基礎の上に建設されなければならない。」

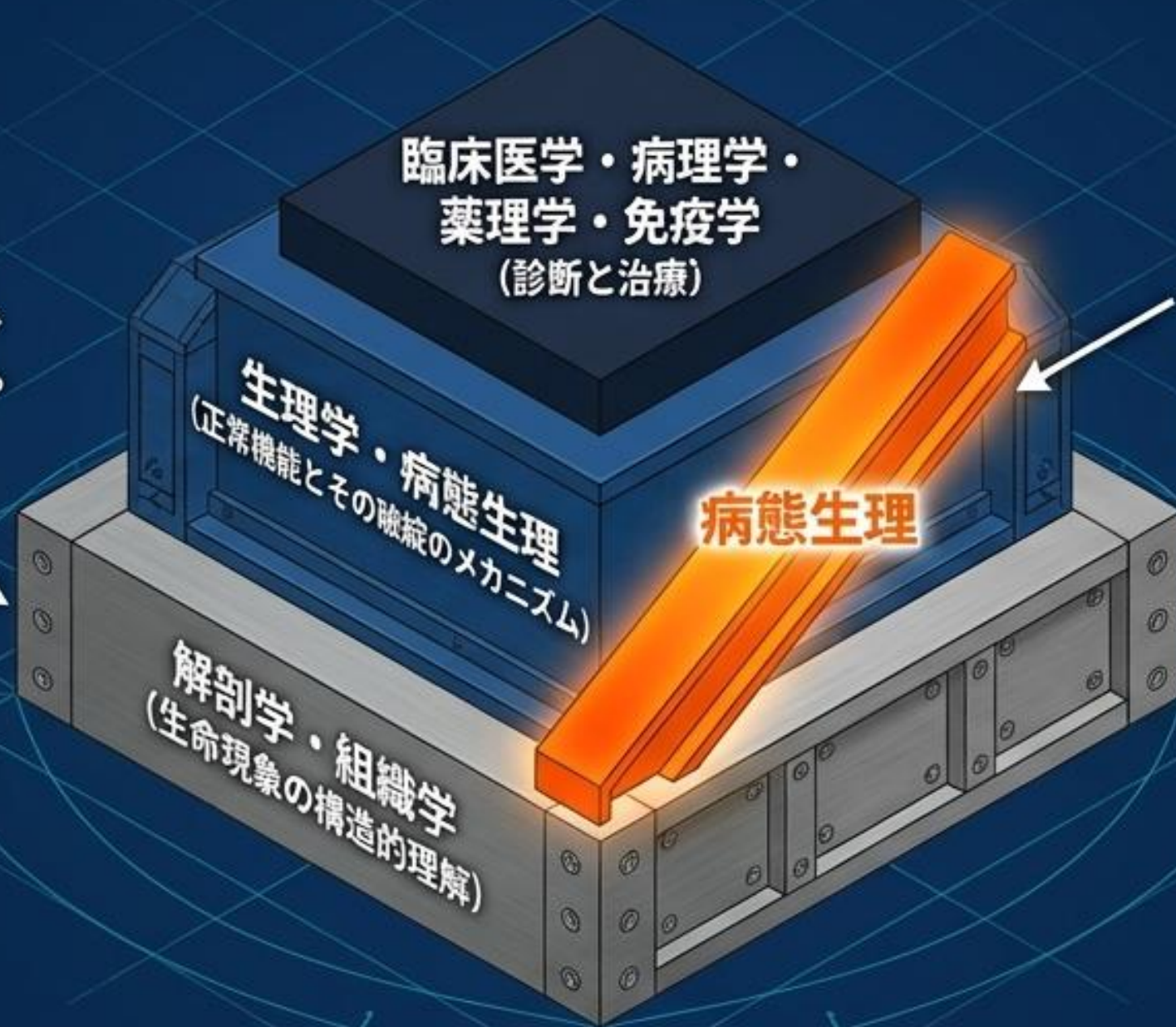
生命現象は、大きく分けて
「構造」と「機能」から成り立つ。

生理学は個体内での各臓器のつながりや
体全体の視点で「機能」を対象とする。

生理学は、すべての臨床医学および医学研究の基礎である。

基礎医学と臨床医学をつなぐ「病態生理」の架け橋

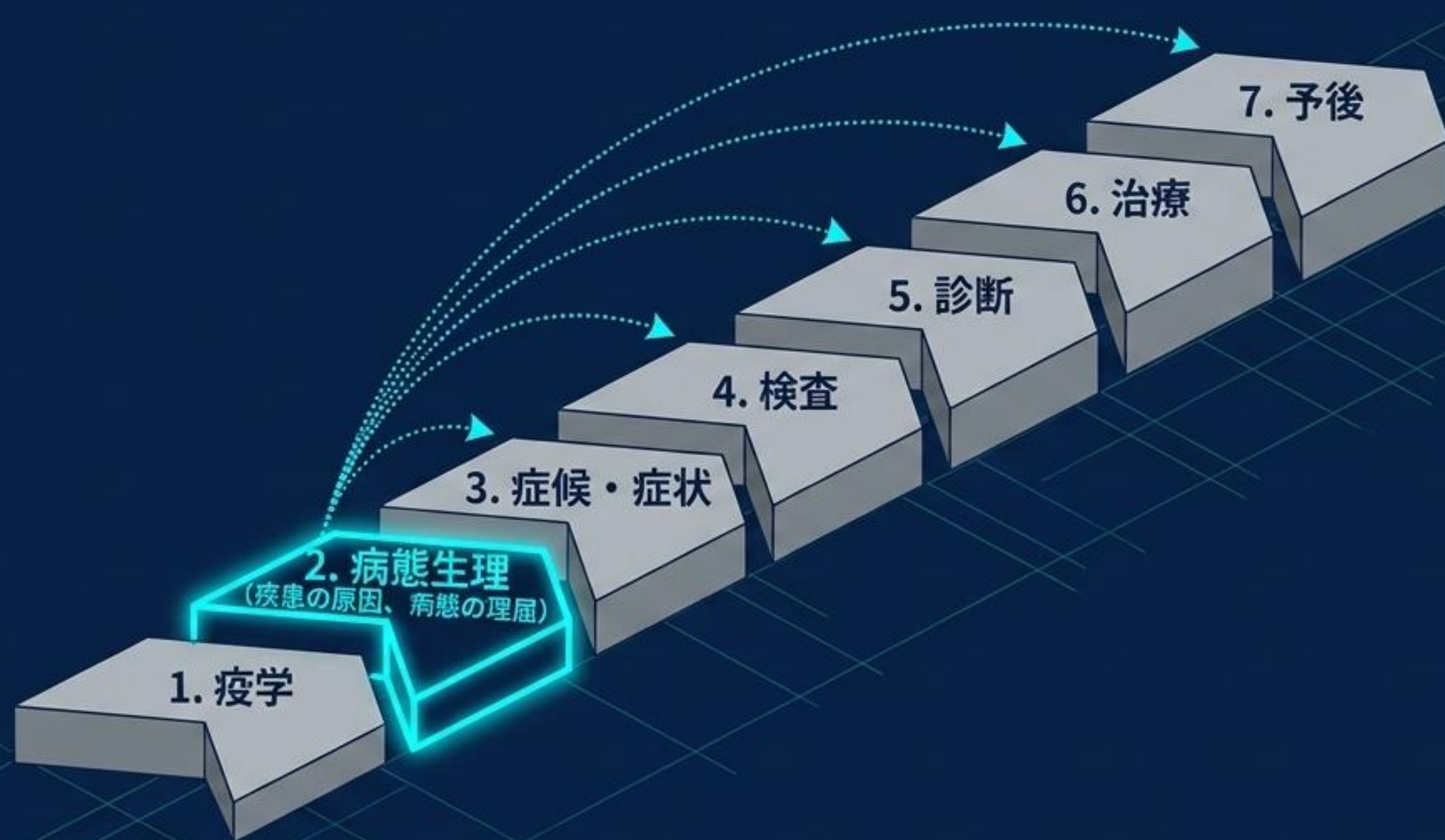
解剖学・組織学と結びつけて、
生命現象を機能的に学習する。



正常機能が破綻して病気になる
メカニズム (病態生理) は
生理学に含まれ、臨床医学と
深くオーバーラップする。

生理と解剖は臨床医学の基礎。
生理学の確固たる理解の上に、臨床医学を積み上げることができる。

臨床医学の学習ステップ：症状や検査結果の背後にある「理由」を見抜く



症候、検査、診断、治療を正しく学習し実践するためには、
その根底にある「生理・病態生理」の理解が必須である。

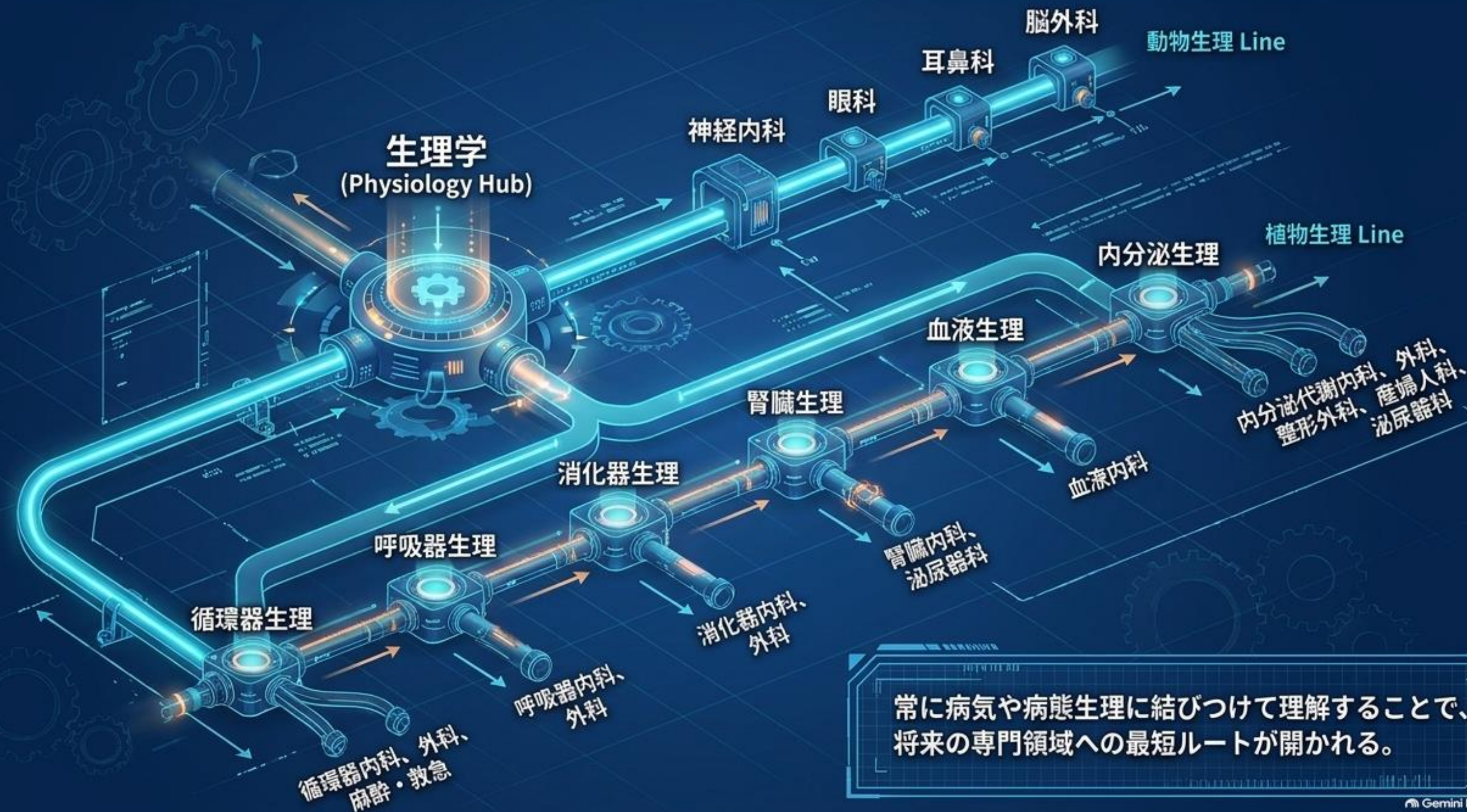
なぜ国試やCBTで「病態生理」が問われるのか



国家試験は「診断や治療を思い出すだけの
単純な丸暗記」では通用しない。

病態生理を問う問題の比重が高い。
内科の比重が多い国試においても、生理学はその最大の基盤となる。

生理学の「路線図」：すべての専門診療科はここから出発する



AI時代の臨床：我々はどのような医師になるべきか？

マニュアル診療



- 短時間でこなす単純なパターン診療。
- 表面的な症状とガイドラインを照らし合わせるだけの作業。

結論: 近い将来、AIに取って代わられるリスクが高い。

病態生理をふまえた診療



- ガイドラインなどのエビデンスを参考にしつつ、個々の患者の病態を深く考察する。
- 教科書通りではない、複雑で個別性の高い患者さんの診療が可能。

結論: AIには代替できない「医師の思考力・臨床推論力・診断力」。

「記憶に残る学習」を実装するための3つのアクション



Step 1: 病気と結びつける

基礎を学ぶ段階から、常に病気や病態生理を意識する。

Tip: 「病気がみえる」シリーズなどの臨床参考書を手元に置き、正常と異常（病気）をセットで学ぶ。



Step 2: 臨床の現場を想像する

机上の空論にせず、将来の臨床実習で出会う「目の前の患者さん」を想像しながら学ぶ。
多くの症例を疑似体験する。



Step 3: 他者と議論する

定期的にチュートリアル形式の勉強会を開く。

自分の頭で考え、言語化し、ディスカッションすることで知識は強烈に印象づけられる。

結論：生理学は単なる基礎科目ではない。

**「生理学は、あなたの臨床推論を駆動する
『オペレーティングシステム』である。」**

表面的な丸暗記を捨て、生命の「機能」と「理屈」を構築しよう。
その確固たる基礎の上にのみ、AIに代替されない、真の臨床医の道が拓かれる。

